Akita University

境界設定と生活様式の問題

立　花　希　一

The Problem of Demarcation and A Certain Way of Life

Kiichi Tachibana

Abstract

In this world there exist at least two types of men. One is the religious and the other is the non-religious. Their ways of life are distinctly different from each other. And the discussions for and against each way of life and thought have been continuing. The point at issue is mainly derived from their different views of science. K.R.Popper is known as the representative of non-religious rationalists. In this paper I specify Popper's view of science by critically examining his criterion of the demarcation between science and non-science. Then I identify the most important representative of the religious people by examining their various views of Popper's criterion.

Ⅰ．はじめに

世界，あるいは社会全体を見渡した場合には過去もそうであったろうが，今日では一つの社会を見た場合にも，その社会は多様な生活様式（the ways of life）を抱え込んでいる。しかも国際的な情報網により，他の社会の文化を知り，それを吸収することによって，さらにそれに拍車がかかっている。これまで「文化」というと歴史的に築かれてきた一つの伝統なり生活様式を個人が受け継ぎ，身につけていくという側面，すなわち，歴史的，社会的に個人が作られていくという側面が強調されていた。その典型が中世のキリスト教社会である。キリスト教社会は，キリスト教という一つの宗教的立場から学問，教育，芸術，文学，経済，政治，法，道徳が統合された一枚岩的な社会であった。

それに対し，一つの社会が多様な生活様式を抱える社会に生まれ，育っているわれわれには，「生活様式の選択」という可能性が生じている。確かに各人は，何らかの伝統をもった社会に生まれ，育つのであり，多かれ少なかれ無意識的に一つの生活様式を身につけているわけであるが，その社会の伝統に完全に縛られているわけではない。個々人が自分に合う生活様式を選択できるようになったし，しかも現実にしているのである。すなわち，主体が社会から個人に移り，伝統によって個人が作られる――もちろんその側面も残っているが――というより，個人が生活様式を主体的に選びとれるようになったのである。ここに「選択の問題」が生ずる。

先に多様な生活様式と述べたが，それではどのような生活様式があるのだろうか。あるいはどのような選択の可能性があるのだろうか。十七，八世紀以来，世俗化（secularization）がかなり進んでいるとしても，「生活様式の選択」の一つの形態として，「改宗」（conversion）という現象があるように，今日でもやはり，宗教的な生活様式と宗教的でない生活様式（あるいはそれと近似的?に科学的な生活様式と科学的でない生活様式）が非常に顕著に対照される。(1)

Akita University

カトリックの家庭に生まれ育ったからカトリックの信者であることが当然（natural）と考えられているとか，理屈ではなく感情的に宗教が嫌いで世俗的な生活様式をとっているとかいう場合はさておき，各生活様式の背後には一定の思想が存在しているのであるから，主体的，意識的な選択の場合にはなおさら，背後にある思想に対する理論的検討が不可欠になるであろう。特に知性本位主義的（intellectualistic）な西欧社会では，理論的な判断に基づく決定（theoretical decision）が非常に重要なことと考えられている。例えば，ここにキリスト教徒と非キリスト教徒がいてお互いに議論すると仮定しよう。その結果，非キリスト教徒が，キリスト教の神が存在することなどキリスト教の教義が真であること，またキリスト教的な生活様式が他の生活様式と比べより良いものであるということを納得するとしたら，その人がキリスト教徒に改宗するのは当然のことであり，またそうすべきであるということが前提されている。その逆もまた真である。実践的問題を理論的に考察し，理論的に決定し，選択していくというこの「理論的決定」を尊重するという態度は宗教の問題ばかりではなく，他のありとあらゆる実践的な問題にも適用されるべきだというのが西欧社会における一つの規範となっている。

こうした文脈の中から，ポパーの科学と科学でないものとの間の境界設定の問題が問題として生じてくるのであるということを，ポパー自身の発言を通して先ず確認し，その後で，ポパーの境界設定基準を明確にすることにしたい（第II節）。次に，ポパー自身は経験科学でないものとして数学，論理学，形而上学，エセ科学を挙げ，宗教については言及していないが，当然宗教もその中に入ってくるのであり，このことが宗教者に問題を投げかけるものであることを論じ，境界設定の問題と生活様式の選択の問題の関係を考察することにしたい（第III節）。

II．ポパーの境界設定の問題とその基準の明確化

a．ポパーの境界設定の問題の倫理的背景

境界設定の問題が，ポパーにとって認識論上の二つの根本問題の一つであることは周知の通りである。1979年になってようやく出版されたポパーの処女作，『認識論の二つの根本問題』(2)——『科学的発見の論理』(3)（1959年）はこれを半分にきりつめた圧縮版であった——における二つの根本問題とは，帰納の問題と境界設定の問題であったことがそれを端的に示している。またポパーは，境界設定基準を理解しない者は彼の主要な思想の浅薄な理解すらできないとまで言い切っている(4)ことからも境界設定の問題の重要性はうかがわれよう。

ところがポパーにとっては，境界設定の問題は，特にそれに直面した当初は，純粋に理論的，哲学的な問題ではなく，むしろ倫理的な問題と深くかかわった実践的な問題であったのである。ポパーはその問題の意義を次のように明確に述べている(5)。「最初はそれ〔境界設定の問題〕を哲学的な問題とは思ってもいなかった。当時私は十七歳になったばかりであり，哲学を少しはかじっていたものの，哲学に対して自分自身の貢献をしようなどとは夢にも思っていなかった。それは私にとって緊急な個人的問題であった。そしてその解決は，フロイトやアドラーの精神分析学とマルクス主義を拒否する(6)という私の決断にとっても役立った」と。さらにその問題がもつ社会的意味についても，「それによって，私を深く悩ませていた知的な問題，特に実際的な意味（例えば政治的な意味）をも明らかに担っているような知的な問題が解決された」(7)と述べている。

ポパーにとっての「緊急な個人的問題」とは一体何だったのであろうか。拙稿『ポパーと社会主義』(8)で論じたように，若い時分に共産主義者になっていたポパーが，「生涯におけるもっとも重要な出来事の一つ(9)」と回顧される事件が起こったことがきっかけとなって，社会主義の到来を早めるために階級闘争の激化を要求し，そのためには犠牲はつきものであるというマルクス主義理論の一教説の問題点を自覚し，それを一つの倫理的立場から理論的に批判し，決別するというもの

Akita University

だったのである。

それではポパーは諸理論を内在的に純粋に比較検討することによって境界設定基準を見い出し，それをマルクス主義理論に適用した結果，科学的とはいえないということが判明したので，それにエセ科学というレッテルを貼ったのであろうか。

ところがそうではないのである。ポパーは主としてマルクス主義を批判するための理論的な武器として自らの境界設定基準を利用した。当時オーストリアには，宗教的教義は知識とはいえず科学がもっともすぐれた知識であるという反宗教と結びついた科学主義的風潮があった(10)。この科学主義的態度を共有していたポパーは，マルクスの理論が実際は科学ではなく，エセ科学にほかならず，劣った知識であること示せるような境界設定基準を考案したのである。

ポパーの，科学とエセ科学とを区別するという，このもともとの境界設定の問題は，倫理的な境界設定問題とよべるであろう。というのは，この境界設定基準に従えば，単に科学と科学でないものが区別されるだけではなく，科学でないものはエセ科学として低い価値評価が与えられるものだからである。以上の経緯をみれば，先程述べた「理論的決定」の尊重という規範がポパーにも生きていることが明らかであろう(11)。実際的問題の解決に理論的検討が不可欠であることが前提されているからである。

ポパーにとってこの倫理的な境界設定の問題は個人的な問題であった。『知的自伝』によると(12)，少数の友人以外には公表する気は全くなかったのだが，後年，ファイグルに勧められて，『探究の論理』(1934年)——その二十五年後に協力者と共に自らの手で英訳され，『科学的発見の論理』として広く知られるようになった——という本の形で発表することになったのである。

その『科学的発見の論理』では，境界設定の問題は，自然科学を特徴づけるための方法の問題の一つとして扱われ，また科学とエセ科学との間ではなく，科学と形而上学との間に区別を設ける境界設定の問題となっている(13)。したがって，マルクス主義，個人心理学，精神分析学は全く言及されていない。しかも，一見したところ，科学と形而上学とは単に区別されるだけであって，価値評価は下されていないようにみえる。なぜなら，形而上学を無意味（nonsense）として退ける論理実証主義(Logical Positivism)とは違って，ポパーは形而上学を無意味とはみなさないどころか，科学を発展させるうえで役に立つものとみなしているからである(14)。

それでは，『科学的発見の論理』の境界設定の問題は，境界設定の問題を考察するように駆り立てた当初の動機が何であれ，その倫理的，実践的な問題から超越し，純粋に方法の問題に転化したのであろうか。

ポパーはこの変化の事情を明確に述べていないので，推測の域を出ないのであるが，ポパーのいろいろな発言から勘案するとそう簡単には割り切れないように思われる。

㈠『科学的発見の論理』発表後も，再三再四，境界設定の問題にかかわった当初の動機を述べていること(15)。

㈡一九二〇年代，三〇年代のオーストリアの政治状況からして，マルクス主義批判を公表するのを控えたと述べていること(16)。

㈢『探究の論理』の着手に向かわせたのは部分的には，マルクス主義の批判であったこと(17)。

㈣『歴史法則主義の貧困』，『開かれた社会とその敵』で，マルクス主義の理論は反証可能ではなく，したがって科学的ではないとして批判していること(18)。

もしポパーの境界設定の問題が純粋に方法論的な問題であり，しかも単に区別するだけであって価値評価を下していないとしたら，境界設定の問題の意義は薄れ，なぜ境界設定をする必要があるのか不明瞭になるであろう。逆に，単に区別するだけではなく価値評価を伴うものだとしたら，純粋に方法論的な問題ではなく，実践的な問題（倫理上，宗教上の問題も含む）と深くかか

Akita University

わってくるであろう(19)。生活様式の選択の問題とのかかわりで境界設定の問題を考察しているわれわれは，後者の道を採用しているわけである。それでは次にポパーの境界設定基準を明確にすることにしよう。

b．境界設定基準の明確化

このポパーの境界設定基準を理解するには少なくとも二つのことに注意すべきであるが，その前に科学の目的という大前提を述べておかなければなるまい。'science' という言葉はラテン語の 'scientia' の訳語であり，それは「知ること」を意味する 'scīre' の派生語である。すなわち，科学の目的は，知識（真なる理論(20)）である。われわれ人間は誤謬を犯すものであり，したがって真理を所有しているわけではなく，偽なる言明も所有しているので，真なる言明と偽なる言明を区別し，偽なる言明を排除していくことが必要になる。そこで科学の活動では，批判，反証の試みが不可欠なのである。したがって，理論が反証可能であることが科学理論の条件として要請されることになろう。

注意すべき第一の点は，ポパーの境界設定基準は二つの要請から成り立っているということである。一つは論理的なもの，すなわち，理論（全称言明の形で表わされる）が基礎言明（ある時空領域の観察可能な出来事を記述する単称存在言明）と論理的に矛盾する関係になければならないという論理的な反証可能性(21)の要請であり，もう一つは方法論的なもの，すなわち科学者が守るべきいくつかの規則の要請である。この両者の関係は，もし方法論的規則に従わなければ，たとえ原理的な反証可能性の要請を満たしているとしても，その理論は科学の地位を保証されないというものである(22)。というのは，この方法論的諸規則は科学者だったら守らなければならない手続きを提供しているからである。したがってポパーは，例えば次のような命令の形で，方法論的規則を述べる(23)。「批判可能な理論を提案せよ。可能な決定的反証実験――決定実験――を考え出せ。しかしその批判を批判的に検討するまでは，そう簡単に理論を棄てはならない」と。

前者の理論的な反証可能性の要請は，理論を科学的なものと科学的でないものとに区別する基準であり，後者の方法論的諸規則は，科学者の守るべき規則を定めたものであるから，理論間の区別ではなく，科学者と呼べる人間とそうでない人間を区別する基準なのである。あるいは後者は，理論に対する態度の区別と呼べるかもしれない。この相違を銘記することが肝要であろう。しかし，ポパー自身明確に区別していないように思われるのである。倫理的境界設定基準とわれわれが呼んだものは，マルクス，アドラー，フロイト，およびそれらの追従者たちの独断的態度とアインシュタインの批判的態度を区別するものであった(24)。すなわち，後者の科学的態度と前者のエセ科学的態度の区別である。ところが，『科学的発見の論理』では，形而上学的理論と科学的理論の区別として提出されており，方法論的諸規則は，反証可能性の基準に対する約束主義者（Conventionalist）の批判からそれを擁護するために提出されたものである。また，論理的な反証可能性の基準だけでは，純粋存在言明のみが形而上学的な理論として，科学的理論と区別されるだけで，マルクス，フロイト，アドラーの理論は科学的であるということになってしまうのである。この性格の違う二つの基準が，科学と科学でないものとを区別する境界設定基準として主張されたことが，誤解や批判を生み出す原因を作ったと考えられる。

境界設定問題で注意すべき第二の点は，ポパーの「反証不可能性」の意味が二つあるということである。純粋存在言明，例えば「神は存在する」とか「不老不死の薬が存在する」といった，時空規定を超越するものの存在を主張する言明とか，時空規定を限定せず，曖昧な形で存在が主張されている言明は，原理的に反証不可能である。これが第一の意味である。第二の意味は，あらゆる反証の試み，批判を回避するために導入された補助仮説を内蔵した理論もまた原理的に反証

Akita University

不可能である。もしあらゆる批判を完全に組み込んだとしたら，その理論はトートロジーに等しくなろう。しかし，もしこのあらゆる批判と思われた批判が実際にはあらゆる批判でない場合には，反証可能である。その理論は，現時点では経験的にテスト可能ではないとしても，将来テスト可能になるかもしれないからである。

ここで先程述べた理論間の区別と態度間の区別がかかわってくるのだが，ある科学者がいくら独断的に理論を守ろうとしても，もしその理論が反証可能であるならば，他の科学者によって反証の試みがなされるであろう。他方，もしある科学者の態度がいくら批判的であっても，理論が原理的に反証不可能であるならば，反証の試みは成功するわけはない。したがって，すべての人間が独断的態度を採用したら，科学は成立しないであろうが，かといって科学者全員が批判的態度を採用する必要もないであろう。むしろ，ある理論を守ろうとするグループと批判しようとするグループが存在し，相互に批判的検討や議論を行う方が望ましいであろう。こうした活動の結果，理論は変化していくのである。方法論的諸規則は，科学者がとるべき態度を規定する規則というよりむしろ，理論が反証不可能なものに陥っていないかどうかを注意するように喚起する規則として解釈さるべきかもしれない(25)。

これまでの考察の結果を要約すると，

(一)真理探究という科学の目的にとって，批判，反証の試みは不可欠である。したがって，理論が原理的に反証可能であることが科学理論の条件として要請されなければならない。そこで原理的に反証可能でない言明，例えば「神は存在する」といった言明は，それ自体としては科学の埒外に置かれることになる。

(二)われわれは，理論の科学的性格と，人間の理論に対する態度（批判的，科学的態度と無批判的，独断的態度）を区別しなければならないが，理論は人間によって作られるものであり，人間の態度，活動によって理論は変化し，その結果，理論の身分も変化する。その際，研究の過程で，理論が反証不可能になってしまわないように留意すべきである。

(三)形而上学（純粋存在言明の形で定式化される）と科学の区別と，エセ科学（批判排除的装置によって反証不可能になった理論）と科学の区別は同一のものではない。しかも，後者は，まだテスト可能になっていない研究プログラム的な理論から全く反証不可能になった理論まで幅広く存在し，したがってその境界設定を行うことは非常に困難である。

ポパーの境界設定に関する見解について様々な批判がなされるている。ここでは主としてクーン，ラカトシュの批判を検討しておくことにしたい(26)。

c．反証可能性の基準に対する批判の検討

私見によればポパーの反証可能性の基準は，二つの前提のうえに成り立っている。一つは人間可謬論（Human Fallibilism）であり，もう一つは真と偽の非対称性（asymmetry between truth and falsity）である。反証主義を批判する者は，この二つの前提と反証主義とは両立しないと批判する。彼らの批判の論点はこうである。理論が決定的に反証されるためには，理論の反証に用いられる基礎言明が真でなければならない。ところが，可謬論者ポパーによると，基礎言明も誤謬を免れず，検証（verification）できないことになるのだから，そのような基礎言明によっては決定的に反証されえない。基礎言明の真，偽が確定できない以上，理論の真，偽も確定できないことになる。とすると，誤った反証――基礎言明が真でないにもかかわらず真だとみなして，理論を反証してしまうこと――によって，真なる理論を排除してしまうかもしれない。したがって，無謬の基礎言明を主張しない反証主義は成立しない。そこでクーンは，「サー・カール〔ポパー

Akita University

のこと〕は素材反証主義者ではないけれども，彼を素朴反証主義者とみなすのが適切であると私は主張する(27)」と断言している。クーンは反証主義と人間可謬論が両立しないとして批判しているわけである。

他方，別の解釈とその批判も存在する。ポパーは究極的には約束主義者にほかならず，彼の方法論では，理論の真，偽問題は扱えないと。ポパーの言明の中には，このような解釈をされても，それを打ち消すことができないような言明がある。例えば，次のようにポパーはいう。「基礎言明は決意または合意の結果として受け容れられる。その限りにおいて基礎言明は約束である(28)」とか，「どのようにしてわれわれは理論を選ぶのかという問いに対する私の答えは約束主義によって与えられる答えと似ている(29)」と。

また真理問題については，「基礎言明が真あるいは偽であるという必要もない(30)」と。

ラカトシュはこの解釈をしている。「ポパーの古典的な『探究の論理』は，単にそれ自身のために追究される〔「約束的規則」によって設定された〕科学のゲームと整合的である(31)」と。

ここでは，真と偽の非対称性が否定されている。言明の真なることを確定できないとすれば，言明の偽も確定できない。したがって言明の受容は，真とか偽とかとは，無関係に，恣意的に決定される約束にすぎないということになるというものである。

要するにポパーは次のジレンマに追い込まれたことになる。基礎言明の無謬を主張する独断的な反証主義者か，基礎言明の受容は恣意的な決定にすぎないと主張する約束主義者かのどちらかを選択せざるをえなくなるというのである。

反証主義を批判する者は，無謬な基礎言明が存在しないならば，その基礎言明の受容は恣意的なものになってしまうと仮定しているようである。したがって，無謬の基礎言明の存在を主張する者は独断的反証主義者になり，その存在を否定する者は約束主義者になってしまうのである。

ポパーはこの仮定を否定する。基礎言明は真であるということを確定できないとしても，批判的検討の結果，現在のところ，その基礎言明を反証できないとして，それを暫定的に受け容れることができる。この決定に疑いをはさむ者は，その基礎言明を批判することができる。時には批判が成功するかもしれないし，時には批判は反批判によって退けられるかもしれない。批判も反批判も共に反証の試みである。われわれが批判しようとしている対象が疑わしいとか誤っていると主張しさえすればいいのであって，われわれの批判が拠り所にしている言明が真であると主張する必要はない。というのは，われわれが何らかの言明を受け容れるとき，われわれは批判的検討の結果，すなわち反証の試みの失敗の結果，受け容れるのであって，それらの言明を真だとして受け容れはしない。他方，われわれが言明を拒否するときは，それらを偽として拒否するのである。普遍言明については，反証と検証の非対称性にすぐ気がつくが，基礎言明については非対称性を見失いがちである。しかし，ポパーのいうように基礎言明も無謬でないとするならば，誤謬の余地があり，したがって批判の余地があるわけである。真と偽の非対称性をしっかりと把握すれば，人間可謬論と反証主義は両立する。というよりもむしろ，人間は誤謬を犯す者であるがゆえに反証主義が成り立つといった方が適切かもしれない。それぞれの段階でわれわれはつねに，どんな言明に対しても批判主義的，反証主義的アプローチを採用することができるのである。

ポパーの反証主義においては，基礎言明は何らかの無謬な観察経験に基づいて独断的に真として受け容れられるのではない。だからといって，恣意的な決意によって約束的に受け容れられるものでもないのである。基礎言明の受容は入念な批判的検討の結果，受容されるのであるから，約束主義者のような恣意的な決定ではないし，また誤りが発見されればいつでも撤回する用意があるのだから，独断的でもない。すなわち，理論の反証に用いられる基礎言明は，批判的，合理的に受容されるのである。

Akita University

クーンは次のような批判もしている。クーンによれば(32),「通常科学（normal science)」に従事する科学者は，理論を反証しようとはせず，理論から導かれる帰結を実験結果とうまく適合させるための補助仮説を考案することによって，理論を救おうとする。したがって，ポパーの反証主義は現実の科学者が行っている活動を描写しそこなっているといって批判する。これが有名な科学史の事例研究に基づく反証主義批判である。

先ず，クーンの批判が理論の反証可能性についての批判ではなく，方法論的諸規則に対する批判であることに注意すべきである。このクーンの批判については，次のように答えることができよう。その都度修正される理論が反証可能であれば，その理論は科学的と呼ばれるであろう。したがって，「通常科学」に携わる科学者全員を科学者とはみなさないと，ポパーは主張しないであろう。もし原理的に反証不可能な理論を提出し，しかもこれこそが科学的なのだと主張する科学者がもしいたとしたら，そのような科学者をこそ，ポパーだったら，エセ科学者と呼ぶであろう。

また次のように答えることもできよう。科学史家や科学の社会学者は，科学者や科学理論の範囲をどうやって決定するのか，と逆に質問することによってである。われわれが何かを記述するためには，範囲を限定し，またその中のどれを記述するかを選択する基準が必要になるであろう。ポパーは，その基準として，理論の反証可能性という理論的な基準を提出していると解釈できるのである。観察や実験結果と衝突している理論をどう処理するかでは，科学者の間でやり方が分かれるだろう。因みに，ファイヤアーベントの見解が，この状況で，科学者のとるべき一般的規則は存在しない(33)というものであるならば，彼の見解は正しいといえるであろう。しかし，論理的な基準をも含めて否定しているとしたら，彼は間違っているのである。

ポパーはこのようにして，自分の反証可能性という基準を科学史や科学社会学からの批判から守ることができる。しかし，この試みはポパーの反証主義の精神に違反していないだろうか。ポパーは，理論を反証から救おうとするような試みをしてはならないと主張する。にもかかわらず，ポパーの反証理論は，まさにこの批判を回避するような戦略をとっているのではないか。すなわち，科学とは反証可能なものであると前もって規定しておいて，もししかじかの理論が普通は科学とみなされているのに反証可能ではないとして批判されるならば，したがって，それは実際には科学理論ではないという結論を下してしまうのではないか。このようにポパーの反証理論は，科学史や科学社会学からの反証例を受けつけないようなシステムになっているのではないか。これはまさに「強化された独断主義（Reinforced Dogmatism)(34)」にほかならないのではないかという反論である。

この反論については次のように答えられるかもしれない。先ず，反証可能性の基準は科学理論についてのものであり，その基準自体は科学理論ではなくメタ理論に属するものであるから，反証可能性は必ずしも要求されない。しかし，メタ理論にも反証可能性を要求するとしたら，以上のような批判をする人は，そうした批判をすることによって，まさに「反証の試み」をしているのであり，反証の意義を認めているのではないか。いわばメタメタレベルにおける反証主義者になっているのである。批判的議論――科学上の議論は重要であるが，それは批判的議論の一応用例である――がまさに合理性の要である。したがって，私と合理的な議論のできる貴重な仲間であると。

これまで反証主義に対する批判に対する反批判という形で答えてきたのであるが，ここで注意しておかなければならないことは，反証主義を否定しているかのようにみえるクーンもラカトシュもファイヤアーベント（彼の見解は非常に曖昧であり，そうでない解釈も可能であるが）も，ポパーの基本的見解，すなわち理論と観察言明との原理的な反証可能性（テスト可能性，衝突可能性）については否定していないということである(35)。すなわち先に要約した㈡と㈢については

Akita University

見解の相違が存在するが，(一)の論理的に反証不可能な言明は科学に属さないという次のポパーの言明は批判に耐えており，維持しうるというわけである。

私は，すべての科学的言明はテストされうるものでなければならないと要求しているだけなのである。いいかえれば，テストすることが論理的理由から可能とは思われないというただそれだけのことで諦めて，真として受け容れなければならない言明が科学には存在するのだという見解を私は拒否するのである(36)。

III. 境界設定問題と生活様式

先のポパーの発言からもわかるように，科学的な生活様式を採用する者は，原理的に反証可能でない言明については真として受容（acceptance）することはせず，原理的に反証可能な理論に対して批判的態度を貫き，反証の試みの結果に応じて，その理論を受容あるいは拒否すべきであるということになろう。こうした態度，生活様式は合理的生活様式(37)(rational way of life）と呼びうるであろう。

ポパーの弟子，W. W. バートリーは，ポパーの提唱する「合理的生活様式」が次の三点から成立するものであるとしている(38)。

(一)知識あるいは真理の探究，「知識による解放（emancipation)」,「精神的自由」の追求

(二) 真理性を主張するどんな特定の表現も誤謬の可能性があり，制限されたものであって，最終的なものでないということを認めたうえで，あらゆる態度，観念(ideas),制度，伝統，いわゆる知識，いわゆる精神的自由を非独断的に批判的検討，評価にかけようとする批判的態度

(三)他者の意見に耳を傾け，そこから学ぶ用意のあること

バートリーは，要するに,「合理主義者とは，自分自身の伝統をも含めてありとあらゆることに挑戦し，批判する用意のある人々のことである」と，ポパーの言葉を引用している。さらに，万人は潜在的に批判的，合理的な態度をとれる可能性をもっている点において平等であり，この合理的態度をとることによって「理性による人類の統一（rational unity of mankind)」が確立されうるということまで主張される。

ポパーがこの合理的生活様式を高く評価していることは確かである。少し長くなるが，ポパーの見解が明確に表明されている文章を引用することにしよう(39)。

「個人の態度としての合理性とは，自分の信念を修正する用意のある態度である。その知的に最も高度に発展した形態では，合理性は自分の信念を批判的に検討し，また他者との批判的議論に照らしてその信念を修正しようとする用意からなっている」のに対し，「彼ら〔コミットメントや非合理な信仰を賛美する人々〕は，合理的に推論する能力があるとしても，非合理主義者である。というのは，彼らは自分たちの殻を破ることをできなくしていることに自尊心を見い出し，自分自身を狂気（manias）にとらわれた囚人にしているからである。彼らは，合理的に理解可能な行為として説明（例えば精神科医による説明）ができるであろう行為によって精神の自由を失くしている。例えば，人々はそれを恐怖心――ある一つの考えを自分の人生全体の基礎としている（あるいはそうしなければならないと思っている）がゆえに彼らが執着しているような考えを（もしそれが批判にさらされれば）放棄せざるをえなくなるのではないかという恐怖心――によってコミットしている行動とみなすことができる。(「コミットメント」――たとえそれが「自発的なコミットメント」であっても――と狂信（fanaticism）――周知の通り，それは狂気(madness）と隣りあっているが――とは，したがって最も危険な形で結びつ

Akita University

いているのである」と。

明確に言明しているわけではないが，ポパーが非合理主義者の典型として，独断的な宗教者(正統派のユダヤ教徒やキリスト教徒など）を念頭においていることは容易にみてとれる。例えば，戒律に従って生きることを人生の基礎にしているために食餌規定（カシェルート）が非合理であることを知りつつ，それを守っているユダヤ教徒が一部にいるが，彼らはその典型であろう。かくして，境界設定の問題が生活様式の選択の問題と結びついてくるのであり，特に宗教者の側から，ポパーの境界設定基準に対して批判が向けられることになるのである。

ポパーの見解を含めてそれらを批判的に検討することが，宗教的生活様式を採用する者にとってもまた合理的な生活様式を採用する者にとっても必要であり，実り豊かであると思われるが，その具体的な考察については別の機会に譲り，その予備作業として，思想の類型化の試みをしておきたいと思う。

宗教者の見解にはいくつか類型がある。一つはポパーの境界設定基準を認めたうえで，科学研究を行う際には合理的態度を採用し，宗教は科学ではないのだからという理由で宗教には合理的態度を持ち込まないし，持ち込むべきではないという見解である。第二の見解は，科学にも反証不可能な言明（あるいは言表化されていない黙契(タシット)的なもの）が存在し，科学者はそれに対して無批判的であり，非合理的なコミットメントをしているとして，ポパーの境界設定基準は成り立たないと主張し，われわれは宗教にコミットメントをしているのであるという「お互い様議論（tu quoque argument)」を用いた見解である。第三の立場は，基本的には第二の見解と同じであるが，科学と宗教のどちらにもコミットする立場である。

図式化すると次のような分類が可能である。

	境界設定基準受容			境界設定基準拒否		
科　学	反証可能	受　容	受　容	反証不可能	拒　否	受　容
宗　教	反証不可能	拒　否	受　容	反証不可能	受　容	受　容
人　物		ポパー	レイボヴィッツ		バルト	ポラニー
		1　a	1　b		2　a	2　b

論理的な可能性としては，境界設定基準を受け容れたうえで，科学を拒否し，宗教を受容する立場（1 c），科学も宗教も拒否する立場（1 d），あるいは境界設定基準を拒否したうえで，科学を受容し，宗教を拒否する立場（2 c），科学も宗教も拒否する立場（2 d）という具合に，全部で八通り考えられるが，それに該当する思想家がいるかどうか不明である(40)。

1 bについては，イザヤ・レイボヴィッツ(41)自身は首尾一貫していると考えているようであるが，彼は二つの異なった基準に従った二重生活を送っているわけで，批判的，合理的探究に制限を設けないというのが合理的生活様式を採用する者の態度のはずだから，必ずや衝突が生じるはずである。

2 aについては，バートリーが，『コミットメントへの後退』(42)という書の中で，K．バルト，P．ティリッヒの思想を取り上げ，「信仰主義(fideism)」として特徴づけ，詳細に分析している。

残るは2 bである。この立場は，1 bと異なり，一つの基準に従って両方を受け容れており，首尾一貫しているといえる。しかも，人間は必ず一つの生活様式を採用しなければならないというわけではないし，逆にいえば複数の生活様式を採用できるということはそれだけその人の精神

Akita University

生活が豊かになることであるともいえるかもしれない。さらに，科学者としての生活を送っている彼らは科学の活動を熟知している。ポパーも当然，科学の活動および科学史の事実をよく知っている。にもかかわらず，両者の科学観は異なり，鋭く対立しているのである。この2bの見解をとる代表的な思想家にM．ポラニー（1891－1976）がいる。ポラニーの主著とみられる，『個人的知識（Personal Knowledge）(43)』には「ポスト批判哲学に向けて」という副題がついており，ポパーと鮮明な対立をなしている。したがって，生活様式の選択の問題という観点から，ポパーとポラニーの思想を比較検討することが今後の課題となるであろう。

注

(1) 他にも，芸術家としての生活様式とか政治家としての生活様式とか数え挙げればきりがないであろうが，ここでは便宜的に，宗教的な生活様式と非宗教的な生活様式を念頭において考察することにしたい。

(2) K. R. Popper, *Die beiden Grundprobleme der Erkenntnistheorie,* Tübingen, 1979.

(3) K. R.Popper, *The Logic of Scientific Discovery,* Hutchinson, London, 1975.（First Impression 1959）以下［LScD］と略記。

(4) Paul Arthur Schilpp ed. *The Philosophy of Karl Popper*, Open Court, Illinois, 1974, p.976. 以下［PKP］と略記。

(5) ibid., p.976.

(6) 初期の境界設定基準は少々奇妙である。それは一方において，自然科学の理論（アインシュタインの理論）と，他方において社会科学の理論（マルクス主義の理論）および心理学の理論（フロイト，アドラーの理論）が対比されていることである。この対比には無理があろう。例えば，経済学と化学を比較して，一方が科学的であり，他方はそうでないと主張することに意味があるであろうか。この比較の奇妙さにだれも気づいていないようにおもわれるのもまた奇妙なことである。

(7) K. R. Popper, *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge,* Routledge& Kegan Paul, London, 1974, p.39. 以下，［CR］と略記。

(8) 拙稿，「ポパーと社会主義」，『哲学・思想論叢』（筑波大学哲学・思想学会）第3号，1985年1月。

(9) ［PKP］, p.25.

(10) オーストリアでは，作家までが科学主義的であったことからも，このことは例証されるよう。S．リップチンは次のように述べている。「若きウィーンの詩人たちは合理主義者であった。彼らは，あらゆる一般化を論理と経験のテストにかけることを主張した。……彼らは深遠さより明晰さを，有毒な神秘主義の矢より誠実な論理の武器を選好した」と。
Solomon Liptzin, *Germany's Stepchildren*, Philadelphia, 1944, pp. 215-216.

(11) 理論的検討をしたからといってポパーの決定が正しかったということが必ずしも含意されないことは当然である。

(12) ［PKP］, pp. 65-67.

(13) ［LScD］, p. 34.

(14) ibid., pp.277-278.

(15) ［CR］, pp.33-41., ［PKP］, p.29, pp.31-33.

(16) ibid., p.26, 90.

(17) ibid., p.89.

(18) K.R.Popper, *The Poverty of Historicism,* Routledge&Kegan Paul, London, 1957, pp.128-130. *The Open Society and Its Enemies,* Routledge&Kegan Paul, London, 1973, vol.II, p.326, pp.

Akita University

331-332.

(19) すなわち，議論可能性（arguability），合理性（rationality）の問題との関わりである。この合理性の問題が実践的な問題に連なるものであることはいうまでもないことであろう。

(20) 理論とは単純にいって言明の集合であるが，相互に無関係な言明の単なる寄せ集めではなく，必要条件として論理的に無矛盾であることが要請されている言明の集合である。

(21) 理論と基礎言明が矛盾した場合，基礎言明を受容すれば理論が反証されることになるが，矛盾した場合には必ず基礎言明を受容しなければならないというわけではないので，「反証可能性」というより「衝突可能性」という用語の方がより適切であろう。ポパー自身，そのような言葉使いを示唆している。「これ〔反証可能性〕によって私は次のことを意味する。すなわちテスト言明（基礎言明……）との衝突の可能性のことである」（[PKP], p.987）と。

(22) 理論間の区別の問題に科学者の行為が関わってくることによって，境界設定基準が動揺するのである。

(23) [PKP], p.984.

(24) ibid., p.29.

(25) このことは，理論の身分が状況（主として実験状況）によって変化していくことを示している。そこで研究プログラムと研究成果（理論）の区別が必要になってくる。マルクス主義や歴史法則主義を理論としてではなく，歴史や社会を分析するための研究プロブラムとみなせば，ポパーのように独断的にそれらを拒否することはできなくなるであろう。もしプログラムを成果と取り違えて，反証不可能であるとして排除してしまうことが許されるとしたら，例えば，ポパーの状況論理による制度分析もプログラムの域を出ていないのであるから，その分析方法も排除されてしまうことになるだろう。

(26) ポパー学派をめぐる科学哲学の現状をみわたすと，ポパーの反証主義はクーン，ラカトシュ，ファイヤアーベントらの批判によって打破されたかのような印象を受けるが，彼らの批判を再検討することによって，反証主義の批判に耐えている部分を明確にすることが重要と考えているからである。

(27) Thomas S. Kuhn, Logic of Discovery or Psychology of Research?, in *Criticism and the Growth of Knowledge,* edited by I. Lakatos and A. Musgrave, Cambridge University Press, London, 1970, p.14.

(28) [LScD], p.106.

(29) ibid., p.108.

(30) ibid., p.274.

(31) I. Lakatos, Popper on Demarcation and Induction, in [PKP], p.253.

(32) Thomas S. Kuhn, op. cit., pp.1-23.

(33) 一般的規則がないとしても，ファイヤアーベントのようなアナーキズムでもなく，また，M. ポラニーのような「指導的科学者の選好とその服従」といった権威主義でもなく，できるだけ規則を明確にし，合理的にしようとする試みがなされる必要があろう。

(34) [CR], p.334.

(35) 例えばクーンは次のように明言している。「『探究の論理』の中で，カール卿は，経験的証拠に対する関係における一般言明とその否定との非対称性を強調した。科学理論は，そのあらゆる可能な事例にうまく適合するということを立証しえないが，ある事例にはうまく適用しえないということを明らかにできる。この論理的自明の理とその含意が強調したことは，一歩前進であり，そこから後退してはならないものだと私には思われる」と。

Thomas. S. Kuhn, op. cit., p.13.

(36) [LScD], p.48. 傍点筆者。

Akita University

(37) 科学と合理性，あるいは科学者と合理主義者とは同じものではないことに注意すべきである。科学者の中には自分の理論を独断的に守ろうとし，批判に耳を傾けない科学者も存在するからである。彼らはいわゆる科学者であるかもしれないが，合理主義者ではない。

(38) W. W. Bartley, III, Critical Study : The Philosophy of Karl Popper, Part III. Rationality, Criticism and Logic, in *Philosophia,* vol.11, 1982, p.123.

(39) K. R. Popper, The Rationality Principle, in *A Pocket Popper,* edited by David Miller, Fontana, 1983, p.365.

(40) 科学の成立には帰納の原理が必要であるが，その原理は反証不可能であり，科学者はそれにコミットせざるをえないと考えていた論理実証主義者は２ｃに入るかもしれない。またニヒリストは１ｄあるいは２ｄに入るかもしれない。

(41) Yeshayahu Leibowitz (1903-). イスラエルの科学者（生化学，神経生理学）であり，正統派のユダヤ教徒でもある。ハラハー（ユダヤ教法規）を忠実に遵守する生活を送っているが，それを守ることが合理的であるとか，守ることによって個人あるいは社会が改善されるとかいう理由があるからではなく，ハラハーそれ自身のために守るという立場を一貫してとっている。

(42) W. W. Bartley, III, *The Retreat to Commitment*, Chatto&Windus, London, 1964.

(43) M. Polanyi, *Personal Knowledge : Towards a Post-Critical Philosophy*, The University of Chicago Press, 1958.